令和二年度

第一回　入学試験問題

国　語

注　意

・試験時間は五〇分です。

・解答はすべて解答用紙の定められたらんに記入しなさい。

・記入方法をあやまると得点になりません。

・句読点・記号も一字に数えます。

・漢字書き取りの答えははっきりと書きなさい。

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

陽山小学校五年生の茅野しおりは本が大好きで、いとこの美弥子さんが勤める雲峰市立図書館によく本を借りにいく。ある日しおりは、同じクラスの安川くんから六十年前に図書館で借りた本を返したいが、罰金が必要かと尋ねられる。数日後、安川くんに頼まれて、二人で図書館に向かっている。

明るいグリーンの傘をさした安川くんは、何もいわずにただ黙って話を聞いていたけど、昔はなかなか本が手に入らなかった、という話をした時だけ、

「昔は貴重品だったんだ……」

とつぶやいた。

図書館に到着すると、わたしは美弥子さんの姿を探した。美弥子さんは、ちょうどカウンターの外で本の整理をしているところだった。

わたしは、安川くんがきていることを告げて、美弥子さんをロビーに連れていった。

「あなたが安川くん？」

美弥子さんに聞かれて、安川くんは緊張した様子でうなずいた。

「延滞してた本を、返しにきてくれたのよね？」

美弥子さんはにっこり笑った。その笑顔で、安川くんの緊張も少しほぐれたようだった。

「はい」

①安川くんは、そこで大きく息を吸いこむと、吐きだすように一気にいった。

「六十年前に、祖父がこの図書館から借りていった本を返しにきました」

わたしは安川くんの顔を見た。六十年前の本というのは、やっぱり安川くんのおじいさんが借りた本だったのだ。

「あのね、美弥子さん……」

そこでわたしは、安川くんのおじいさんが亡くなられたことを話した。美弥子さんは、その形のいい眉をひそめて、

「そうだったの……」

まっすぐ立っている安川くんにうなずきかけた。そして、わたしのほうを向くと、「談話室でお話ししましょうか」といった。

「茅野のいとこって、きれいな人だな」

わたしたちを談話室に連れてきてくれた美弥子さんが、またすぐに部屋を出ていくと、安川くんがポツリといった。

「きれいなだけじゃなくて、優しいし、物知りなのよ」

わたしが胸[a]を張った時、ドタドタと階段を上る足音がして、館長さんが姿を現した。美弥子さんもそのすぐ後ろから入ってくる。

館長さんは、ハンカチで額の汗(あせ)をふきながら、わたしに笑いかけた。

「おや、しおりちゃん、ひさしぶりだね。えっと……きみが安川くんかな？」

「はい」

安川くんは立ちあがって頭を下げると、リュックから一冊の本を取りだした。

本は、教科書よりも一回り大きくて、くすんだ黄色をしている。きっと、昔は鮮(あざ)やかな黄色だったのだろう。

「おやおや、これはこれは」

館長さんはうれしそうな顔で、②ボロボロになった本をそっと手に取ると、ページを一枚一枚丁寧(ていねい)にめくった。

わたしは小声で安川くんに聞いた。

「なんていう本なの？」

表紙がずいぶん汚(よご)れている上に、漢字が難しくてタイトルが読めなかったのだ。

「『初恋(はつこい)』」

安川くんは短く答えた。

「外国の小説なんだってさ」

「出版されたのは、昭和三年か……」

館長さんは本の一番後ろを開いて、感心したようにつぶやくと、

「おじいさんは、この本をいつごろ借りたっておっしゃってたのかな？」

安川くんに聞いた。安川くんはすぐに答えた。

「昭和十九年っていってました」

昭和十九年――平成生まれのわたしにとっては、あまりにも昔すぎて、想像もつかない時代だ。

「おじいさんが借りられた本は、この一冊だけだったの？」

館長さんはさらに聞いた。

「はい」と、安川くんはうなずいた。

「じいちゃんは、ほとんど小説を読まない人だったから……③この本は、特別なんだっていってました」

「特別？」

わたしが口をはさんだ。安川くんは少し照れたような顔でわたしのほうを向くと、

「好きな人が読んでたから、自分も読みたくなったんだってさ」

そういって、おじいさんから聞いたという話を語りはじめた。

当時、まだ中学生だった安川くんのおじいさんには、好きな女の子がいた。相手は小学校の時の同級生で、おじいさんはなんとかその子と仲良くなりたかったんだけど、そのころは、男の子が女の子

に気軽に話しかけられるような時代ではなかったのだそうだ。だからおじいさんは、女の子を遠くから見ていることしかできなかった。

そんなある日、おじいさんは図書館で、その女の子が一冊の本を借りていくところを見かけた。それが『初恋』だった。もしかしたら、話をするきっかけになるかもしれない、そう思ったおじいさんは、その子が図書館に返すのを待って、同じ本を借りた――

「でも、結局返却期限までに読みおわらなかったんです」

安川くんはそこで一旦言葉を切ると、首をひねって続けた。

「その時に、じいちゃんが変なことをいってたんです。罰金を払う金がなかったから、本を返しにいけなかったんだって……」

「罰金なんていらないってば。ねえ、館長さん」

わたしは声をあげた。だけど、館長さんはわたしの問いには直接答えずに、

「きっと、小説を読んでることをおうちの人にいえなかったんだね……」

※沈痛な表情でつぶやいた。

「じいちゃんも、そういってました」

と、安川くんは驚いた様子でいった。

「お金がなかったのなら、お父さんかお母さんに相談すればよかったのに、っていったら、親には図書館で勉強してることになってたから、小説を借りたなんてとてもいいだせなかったって。④そんな時代だったんだって……」

「どうして図書館で小説を借りたらいけないの？」

わたしにはわけがわからなかった。図書館で小説を借りるなんて、当たり前のことなのに。

館長さんは、しばらく何かを考えていたみたいだったけど、やがて美弥子さんに何か耳打ちをした。美弥子さんが「わかりました」とうなずいて、足早に談話室を出ていく。わたしが、どうしたんだろうと思っていると、

「安川くんは、この本を読んだことがありますか？」

館長さんが、安川くんに聞いた。安川くんが首を振ったので、館長さんは、今度はわたしのほうを向いた。

「しおりちゃんは？」

わたしも首を振った。さっきチラッと見たところでは、難しい漢字をたくさん使っていて、とても読めそうにない。わたしがそういうと、館長さんは笑って、

「この本は、内容はそんなに難しい本じゃないんだよ。昔の本は難しい漢字をたくさん使っているから、難しそうに見えるだけなんだ」

そこに、美弥子さんが文庫本と小冊子を一冊ずつ手に持って戻ってきた。

「ああ、ありがとう。悪かったね」

館長さんは、その文庫本のほうを、わたしたちに差しだした。
タイトルは『初恋』。作者はツルゲーネフ。安川くんの持ってきた本と同じだけど、こちらは文庫本で、しかもずいぶんと薄い。
わたしは初めのほうのページを開いた。わたしがいつも読んでいる本に比べたら漢字は多いけど、さっきの本よりも断然読みやすい。わたしでも、時間をかければなんとか読めそうだ。
「タイトルを見ればわかると思うけど、これは恋愛小説でね。当時は、『男がこんな軟弱なものを読むのはけしからん』といわれていたんだよ」
「ひどい」
わたしは抗議の声をあげた。
「誰が何を読もうと、そんなの自由じゃない」
「そうなんだけどね」
館長さんは苦笑いを浮かべた。
「そういう時代もあったんだよ。誰が何を読むか、自由じゃない時代がね。それから……」
館長さんは、そこで一旦言葉を切ると、わたしたちの顔を見まわしながら、
「実は、昔は図書館にも罰金があったんだよ」
といった。
「え、やっぱりあったんですか？」
安川くんが驚きの声をあげる。わたしと美弥子さんも、思わず顔を見合わせた。館長さんは笑って、
「昔の話だけどね」
そういいながら、『雲峰市立図書館　五十年のあゆみ』という小冊子をパラパラとめくると、中ほどのページを開いてこちらに向けた。
そこには、図書館ができた当時につくられた規則が並んでいた。その中に、「図書を延滞したものは、一週間目までは一冊につき一日五銭、八日目以降は八銭の罰金をとる」という規則が、たしかに書かれている。
「もちろん、これは昔の話でね」
館長さんが解説する。
「戦後に、公立の図書館はお金をとってはならないという法律ができて、こういう罰金はなくなったんだよ」
へーえ、とわたしは声をあげた。図書館で罰金をとっていたというのは意外だった。きっと、安川くんのおじいさんはずいぶんと悩んだことだろう。罰金は払えないし、家の人にはいいだせないし……。
「もしかして、おじいさんはその直後に、この町を離れられたんじゃないかな？」
館長さんの言葉に、安川くんが目を丸くした。
「そうなんです。急に引っ越さないといけなくなったっていってました……でも、どうして知ってる

んですか？」

⑤「そういう時代だったから……」

館長さんの言葉に、一瞬場がシンとなった。

「そういえば、一時この辺りも空襲が激しくなったって聞いたことがあります」

難しい顔で美弥子さんがつぶやく。そんな雰囲気の中、安川くんが再び語りはじめた。

本をなかなか返せなくて、悩んでいたある日のこと。安川くんのおじいさんは、家の人に突然引っ越しすることを告げられた。戦争が激しくなってきたので、田舎に避難することになったのだ。急な引っ越しで図書館にいく暇もなかったので、とにかく失くさないようにと、本は家財道具の中に大切に入れておいた。

やがて、戦争が終わった。だけど、おじいさんは生きていくのに精一杯で、本のことなどすっかり忘れていた。そして、ようやく生活が落ちついて本のことを思いだした時には、すでにどこにいったのかわからなくなってしまっていた。

捨ててしまったのかもしれない――そう思って、おじいさんはあきらめていた。ところが、去年家を建てかえることになって、庭にある蔵の中を整理していたら、古い机の引き出しの中からその本が出てきたのだ。

おじいさんは、すぐにでも図書館に本を返しにいくつもりだった。だけど、その直後に体調を崩してしまい、自由に出歩けなくなってしまった。それでも、いつか自分の手で返しにいこうと思っていたんだけど、結局体調が戻らないまま入院してしまい――

「――じいちゃんが入院してから、僕はずっとお見舞いにいってました。それで、この間の連休にお見舞いにいったら、家の蔵からあるものをこっそり取ってきてほしいって頼まれたんです。ぼくは、いわれた通りに蔵の中に入って、一番奥にあった古い机の引き出しを開けました。そしたら、古い手紙やなんかと一緒にこの本が入ってて……ぼくが本を病院に持っていったら、じいちゃんは、『これは雲峰の図書館の本だから、雲峰の図書館に返してきてくれないか』って……」

わたしは、目の前のくたびれた本をじっと見つめた。この本は、わたしよりも、美弥子さんよりも、館長さんよりも長い旅をして、ようやくこの図書館に帰ってきたのだ。

「はじめは、じいちゃんと一緒に焼いてもらおうかとも思ったんだけど……」

「おじいさんは、図書館に返してほしいっておっしゃったんだね？」

館長さんがいうと、

「はい」

安川くんは、しっかりとうなずいた。

「だったら、ありがたく返してもらうことにしましょう」

館長さんは立ちあがると、両手でそっと本を持った。そして、少し上を向くと、

「たしかに受けとりましたよ」

まるで、天国のおじいさんに言葉を届かせようとするかのように、大きな声でいった。

数日後。わたしがいつものように、児童書の棚(たな)の前でウロウロしていると、

「これ、どこに持っていけばいいんだ？」

突然、後ろから声をかけられた。振りかえると、安川くんが両手に大きな本を何冊も抱(かか)えて立っていた。

「どこにって……借りるのよね？」

当たり前のことを聞くと、安川くんはうなずいて、

「おれ、図書館で本借りるの初めてなんだよ。あそこに持っていけばいいのかな？」

貸し出しカウンターをあごでさした。

「初めてだったら、その前に貸し出しカードをつくらなきゃ。安川くん、名札は持ってる？」

「名札？　たぶん、リュックのポケットに入ってると思うけど……」

図書館の貸し出しカードをつくるためには、本当は身分証明書が必要なんだけど、陽山小学校の生徒なら名札を見せればつくってもらえることになっているのだ。

それにしても、ぶ厚い本ばかり、何を借りるんだろう――わたしは安川くんの抱えてる本のタイトルをのぞきこんだ。⑥そこには、『戦争』や『歴史』といった文字が並んでいた。

「これって……」

わたしが思わずつぶやくと、安川くんは真面目な顔で、

「じいちゃんの生きてた時代って、どんな時代だったのかなって思ってさ……」

そういって、抱えていた本をちょっと持ちあげた。

「ねえ、そういえば……」

わたしは、この間聞こうと思って、聞き忘れていたことを思いだした。

『『初恋』を読んでた女の子と、安川くんのおじいさんは、結局どうなったの？　うまくいったの？　いかなかったの？」

安川くんは、ちょっとびっくりした顔をして、それから小さく肩(かた)をすくめた。

「うまくいってなかったら、母さんは生まれてないよ」

「え、それじゃあ……」

わたしが目を丸くすると、安川くんは照れくさそうにうなずいて、カウンターのほうへと足早に立ちさっていった。

（『晴れた日は図書館へいこう』緑川聖司）

※　沈痛　…　悲しみや心配事に心をいためるようす

問一　〰〰線a「胸を張った」、b「目を丸くした」の意味として適切なものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

a「胸を張った」　ア　不安になった　イ　うぬぼれた　ウ　得意がった　エ　わくわくした

b「目を丸くした」　ア　おこった　イ　驚いた　ウ　あせった　エ　喜んだ

問二　――線①「安川くんは、そこで大きく息を吸いこむと、吐きだすように一気にいった。」とありますが、この表現から安川くんのどのようなようすが分かりますか。その答えとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　初めて図書館に来て知らない人と話すことに大変緊張しており、本を延滞したことをさっさと謝(あやま)って、すぐに家に帰りたいとあせっているようす。

イ　貴重品だった本を六十年も返さなかったことでどのような注意を受けるのかと不安に思っていたが、勇気を出して正直に伝えようとしているようす。

ウ　六十年も本を返さなかった祖父の代わりにしかられるのは納得(なっとく)できないが、悪いことをしてしまったのだから、祖父の分も謝ろうとしているようす。

エ　本を返さなかったために厳しく注意されると思っていたが、美弥子さんの笑顔を見てしかられないことが分かり、安心して話そうとしているようす。

問三　――線②「ボロボロになった本をそっと手に取ると、ページを一枚一枚丁寧にめくった。」とありますが、館長さんのこの行動の説明として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　本が六十年もの月日を経過して図書館へ帰ってきたことにとても感動し、おじいさんの長く持っていてくれた本がこれ以上いたまないよう、慎重(しんちょう)にあつかおうとしている。

イ　六十年もの間本が大事に保管されていたことに感心したものの、思いのほかいたんでしまっていることが残念で、これ以上いたまないよう注意深くあつかおうとしている。

ウ　おじいさんが持っていた本はとても貴重なもので、図書館がずっと探していた本であったため、ようやくその本がもどってきたことを喜び、大切にあつかおうとしている。

エ　安川くんが本を汚してしまったことに腹を立ててはいるが、せっかく返してくれたのだからその気持ちをおさえようとして、ゆっくりとした動作であつかおうとしている。

問四　――線③「この本は、特別なんだっていってました」とありますが、なぜ特別だったのでしょうか。その答えとして適切なところを本文から十一字でぬき出しなさい。

問五　――線④「そんな時代だったんだって」とありますが、どのような時代だったのでしょうか。その答えとして適切なところを本文から十六字でぬき出しなさい。

問六　――線⑤「そういう時代だったから」とありますが、その時代はどのような状況だったのですか。本文の言葉を使って解答用紙にあてはまる形で、三十字以内で具体的に説明しなさい。

問七　――線⑥「そこには、『戦争』や『歴史』といった文字が並んでいた。」とありますが、安川くんはなぜ戦争や歴史の本を借りようとしたのですか。その答えとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　おじいさんがずっと持っていた本をきっかけに、無料で本を貸してくれる図書館に興味を持ち、これから自分も大いに利用しようと思ったから。

イ　おじいさんがずっと借りていた『初恋』の本を読めるようになるためには、まずは昔の出来事や難しい漢字を勉強しなければならないと思ったから。

ウ　戦時中の雲峰市の様子や当時の図書館のことを館長さんから教えてもらったことで、より一層雲峰市や図書館の歴史について深く知りたいと思ったから。

エ　おじいさんが自分とは全くちがった少年時代を送ったことを知り、その時代についてよりくわしく学ぶことを通しておじいさんの思いをもっと知りたいと思ったから。

問八　次の文章は、この作品をクラスのみんなで読んだ時の、ある生徒の感想です。どの登場人物についての感想か、その人物が分かるように適切な言葉で答えなさい。

1　この人は礼儀正しい人です。目上の人と会った時にまず立ち上がってきちんとあいさつをしたり、年上の人に対してていねいな言葉づかいをしたりしているからです。また、優しい人です。頼まれたことを果たそうと精一杯行動していました。

2　本がたいへん好きな人で、たくさんの本を読んでいることが話の中からうかがえます。また、思いやりもあり、相手の気持ちを考えて行動することができます。相手のために抗議したり、相手のつらい気持ちをきちんと受けとめたりしていました。

問九　この文章からは、昔と今とのちがいが読み取れます。そのうちの一つについて、自分の考えを答えなさい。ただし、条件に従って答えること。

条件1　昔と今がどのように異なっているかを比べて書くこと。

条件2　昔をふまえて、今を生きる自分がどのようにしたらよいかを明確にして書くこと。

条件3　百二十字以内でまとめること。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（1～23は、段落を示す番号です。）

1　木は生きています。呼吸をしています。水をすったりはいたりして、からだをふくらませたり、ちぢめたりしています。

2　冬のかわいた季節には、つくえのひきだしがガタピシいい、ぎゃくにつゆの季節には、重くなったりすることがありますね。また、かわいたおけは、すきまがあいて、水がもれてしまうのに、水をはってしばらくおくと、ぴしっとしたもとのすがたに、もどることがありますね。

3　それは、木が生きているしょうこです。木が水分をすって自分のからだを大きくさせて、板と板とのあいだのすきまを、なくしてしまうのです。①木のそんなはたらきのおかけで、つゆのじめじめした季節にも、たんすの中のたいせつな着物は、外のしめった空気からまもられています。

4　古いヒノキの柱でも、けずれば、またあたらしいはだをあらわし、あたらしいかおりをただよわせてくれます。それも、木が生きているしょうこです。

5　そうでした。木は、かおりもだすのです。

「ヒノキのおふろは、やっぱりいいなあ。」

というおとうさんもいるでしょう。

「お酒は、スギの酒だるでつくったものにかぎるよ。」

という、お酒のみもあるでしょう。

6　いったいなぜ、木は強いかおりをだすのでしょうか。それは、木が、わるい虫にとりつかれないよう、自分のからだをまもっているにおいです。

7　森の中にはいっていくと、むねがすうっとしてきます。空気がおいしくてなりません。それも、ただ、空気がすんでいるからだけではありません。いろいろな木が、それぞれに、自分のにおいをだしあっているからです。森林の空気が、からだにもよいのはそのためです。

8　さかなや貝をはこぶとき、スギやヒノキの葉をつかうのにも、ちゃんと理由がありました。それは、さかなをくさりにくくさせるためでした。ささだんごや、かしわもちやさくらもちにも、やはり意味がありました。おかしを長もちさせるための保存食だったのです。

9　木は長生きです。五百年も、千年も生きつづけます。

10　鉄筋コンクリートの建物は、三十年、四十年で、いま、どんどんたてなおされていきますね。ところが法隆寺（ほうりゅうじ）はどうでしょう。千四百年も生きつづけて、②まだびくともしていません。

11　法隆寺は、木造のもっとも古い建物です。※さいきん、この法隆寺の大修理がおこなわれました。そのときのことでした。屋根をささえていたたる木が、屋根の重みで、すこしたれさがっていたのです。（　A　）、かわらや土をとりのぞいてみると、どうでしょう。まがっていたたる木は、③びんと、またもとのすがたにもどったではありませんか。まるで、あたらしい木とかわらない、わかわかしさでした。

「たる木は、あと千年以上は生きつづける。」

と、宮大工の西岡常一※さんは、たいこばんをおしています。

12　法隆寺につかわれた木材は、樹齢（じゅれい）二千年のヒノキでした。とすれば、このヒノキは、山の中で二

千年生き、きられて建物になってから、また、千三百年も生き、これからさらに、千年以上も、生きつづけることになるのです。

13 木のいのちとは、なんと永遠のものでしょう。木材とは、なんとおおごそかな資源※でしょう。

14 生きものの木とつきあうために、人間も、心をこめてつきあっていきました。たとえばむかしの大工さんは、くぎをつかいませんでした。鉄のほうが、さきにくさってしまうからです。くぎをつかわない建物は、ばらばらにして修理をし、また、組み立てることができました。ばらばらにしてひっこして、またたてなおすこともできました。

15 おわんをつくる木地屋さんは、五年も十年もかけて木をかわかし、それからろくろでひきました。

16 うるしぬりの職人さんは、そのおわんに、何十回もうるしをかけていきました。うるしをぬってはとぎ、ぬってはみがいていくのです。これがうるしぬりでした。

17 うるしはウルシの木の樹液からとれる、④すばらしい塗料（とりょう）です。じょうぶで長もちして美しく、ペンキやニスやラッカーなどどんな人工の塗料にもまけません。世界じゅうの専門家が、「うるしに追いつけ。」と、人工の塗料を研究していますが、人間の力では、まだまだうるしに追いつけません。

18 このように、⑤人間が心をこめて木とつきあえば、木もまた人間にやさしくこたえてくれました。心をこめてつくられた、うるしぬりのおわんやおぼんは、毎日つかってもあらっても、何十年もはたらいてくれました。うるしぬりの朱（しゅ）の色は、年月がたつにつれて、深く美しい色にかわっていきました。

19 木は、みがけばみがくほど、美しいつやもだしてくれました。

20 木は、鳴らせば鳴らすほど、よい音色をひびかせてくれました。バイオリンやチェロやおことは、毎日つかえばつかうほどよい楽器にかわっていきます。ですから、何十年も何百年もつかいこんだ楽器ほど、ねうちが高いのです。

21 きりだされた一本の木は、すみからすみまでつかわれていきました。たとえばシナノキの皮は、せんいになり、布におられていきました。むかしは木の皮を加工して、着物をつくったのでした。

（　B　）、スギやヒノキなら、皮は屋根※をふくのにつかわれていきました。古い建物が目にとまったら、屋根を注意して見てください。木の皮でふいた屋根がありますね。

22 柱をとったあとのきれはしや、板にはつかえないよわいところは、げたになり、しゃもじになり、わりばしになっていきました。

23 そんなふうにして、⑥木はじゅうぶんにはたらいてくれたのち、たきぎになっていきました。肥料になっていきました。そしてさいごは、土にかえっていったのです。

（『森は生きている』富山和子）

※ たる木　…　屋根の裏板を支えるために棟（むね）から軒（のき）に渡（わた）す材

※ たいこばんをおして　…　確実な保証であるとして

※ おごそかな　…　心がひきしまり尊いさま

※ 屋根をふく　…　かわらや茅（かや）などで、屋根をおおってつくる

問一　――線①「木のそんなはたらきのおかけで」とありますが、「そんな」とはどのようなはたらきのことですか。解答用紙にあてはまる形で本文からぬき出し、最初と最後の四字で答えなさい。

問二　――線②「まだびくともしていません。」とありますが、この言葉からどのようなことがわかりますか。その答えとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　法隆寺が木造だからこそ、大修理が可能だということ。
イ　法隆寺に使われている木が、自分のにおいで身を守っているということ。
ウ　木造建築の法隆寺が、とても丈夫であるということ。
エ　法隆寺の建築には、くぎが一切使用されていないということ。

問三　（　　）A・Bにあてはまる言葉を次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　だから　　イ　さて　　ウ　また　　エ　つまり　　オ　ところが

問四　――線③「ぴんと、またもとのすがたにもどったではありませんか。」とありますが、なぜもとのすがたにもどったのですか。本文の語句を使って、十字以内で答えなさい。

問五　――線④「人工の塗料」については、ペンキやニスやラッカーなどがあげられていますが、それに対して「うるし」は何の塗料といえますか。漢字二字で答えなさい。

問六　――線⑤「人間が心をこめて木とつきあえば、木もまた人間にやさしくこたえてくれました。」とありますが、これはどのようなことですか。本文に出てくる木で作られた物のうち、二つをあげてそれぞれ説明しなさい。

問七　――線⑥「木はじゅうぶんにはたらいてくれた」とありますが、

1　このような表現の仕方を何といいますか。その答えとして適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　倒置法　　イ　擬人法　　ウ　反復法　　エ　省略法

2　この言葉はどのようなことを表したものですか。その答えとして適切なところを本文からぬき出しなさい。

問八　この文章の内容をまとめたものとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　木は人間生活をささえていく上で、とても重要な役割を持つ植物である。永遠に使い続けることができる存在である。

イ　木は寿命（じゅみょう）が長く、人間にやさしい存在である。特有のかおりを出すことで、多くの人間を守る役目をになっている。

ウ　木は世話をすればするほど、やさしくこたえるという人間味を持っている。限りある資源であるがゆえに価値もある。

エ　木は切った後も生きており、寿命が長い植物である。形を変え色々な面で役立ち、扱（あつか）い方によりさらに価値を持つ。

問九　この文章を三つの段落に分けるとしたら、どのようになりますか。その答えとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　1～6 ― 7～17 ― 18～23

イ　1～8 ― 9～20 ― 21～23

ウ　1～8 ― 9～17 ― 18～23

エ　1～9 ― 10～20 ― 21～23

三　言葉に関する次の問いに答えなさい。

問一　次の言葉とよく似た意味の言葉を後のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

1　のれんに腕押し
2　猿も木から落ちる
3　泣き面に蜂

ア　弱り目にたたり目　　イ　かっぱの川流れ　　ウ　身から出たさび
エ　石橋をたたいて渡る　　オ　ぬかにくぎ

問二　次の熟語の成り立ちに当てはまる言葉を後のア～クから二つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

1　似た意味の言葉の漢字を重ねたもの
2　上の漢字が下の漢字を修飾するもの
3　上の漢字が主語、下の漢字が述語になっているもの
4　下の漢字が上の漢字の目的語（「～を」「～に」に当たる語）になっているもの

ア　年長　　イ　急増　　ウ　引退　　エ　他人
オ　永久　　カ　読書　　キ　人造　　ク　開会

問三　――線部の言葉の意味として適切なものを後のア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

1　朝の電車は、案の定混んでいた。
ア　思いがけず　　イ　思ったとおり　　ウ　知らないうちに　　エ　残念ながら

2　はからずも学級委員長に選ばれた。
ア　思いがけず　　イ　思ったとおり　　ウ　知らないうちに　　エ　残念ながら

3　今日起こった出来事を母につぶさに報告した。
ア　こっそりと　　イ　適当に　　ウ　大げさに　　エ　くわしく

四　――線1～5のカタカナを漢字に直しなさい。送りがなが必要な場合はひらがなでつけること。

1　意気トウゴウする。
2　田畑をタガヤス。
3　ナレタ手つきで行う。
4　すぐれたセイセキを収める。
5　林をサンサクする。

令和二年度 第一回入試

国語解答用紙

受験番号

氏　名

得　点

一

問一
a
b

問二

問三

問四

問五

問六

状況。

問七

問八
1
2

問九

二

問一
〜
はたらき

問二

問三
A
B

問四

問五
の塗料

問六

問七
1
2

問八

問九

三

問一
1
2
3

問二
1
2
3
4

問三
1
2
3

四

1
2
3
4
5

令和二年度 第一回入試

国語解答用紙

受験番号

氏名

得点

一

問一
a ウ
b イ

問二 イ

問三 ア

問四 好きな人が読んでたから

問五 誰が何を読むか、自由じゃない時代

問六

戦争で空襲をさけるために田舎に	避難しなければならない

状況。

問七 エ

問八
1 安川くん
2 茅野しおり

問九

昔の図書館では本を延滞すると罰金がかかったのに対し、今の図書館では罰金がかからない。そのため、逆に今は本の大切さをわからない人が多く、期限が過ぎても本を返さない人もいる。みなで使う本だからこそ、次の人のことを考え、期限を守って借りるべきだ。

二

問一 水分をす～てしまうはたらき

問二 ウ

問三
A オ
B ウ

問四 木が生きているから。

問五 天然の塗料 ※別解 自然

問六 人間が年月をかけて木をかわかし、ろくろでひき、何十回もうるしをかけてぬってはとくことで、おわんやおぼんは毎日使っても洗っても、何十年も働いてくれ、朱の色は深く美しい色にかわるということ。

人間がバイオリンやチェロやおことを鳴らせば鳴らすほど（たくさん鳴らすことで）、それらの楽器はよい音色をひびかせてくれるということ。（バイオリンやチェロやおことは、毎日使えば使うほどよい楽器にかわり、ねうちが高くなるということ。）

問七
1 イ
2 木は、すみからすみまでつかわれていきました。

問八 エ

問九 イ

三

問一
1 オ
2 イ
3 ア

問二
1 ウ オ
2 イ エ
3 ア キ
4 カ ク

問三
1 イ
2 ア
3 エ

四

1 投合
2 耕す
3 慣れた
4 成績
5 散策